

ヴァンジ彫刻庭園美術館対応検討会
報告書

令和4年3月

目 次

○総括的意見

<本編>

1 施設の評価

- (1) 全体評価
- (2) ヴァンジ彫刻作品の評価
- (3) 建物・庭園などの施設の評価

2 活用の方向性

- (1) 県立美術館の分館としての活用可能性
- (2) 住民主体の創造活動推進の場（アートセンター）の可能性
- (3) 障害者芸術の拠点、ガーデンホスピタルの実践の場としての活用可能性
- (4) 文化イベント、迎賓機能、文化・観光施設のネットワークの核の可能性

3 地域との連携の必要性

4 県への譲渡に当たっての課題

- (1) 賃借契約の解消など資産の整理
- (2) その他

5 申し出に対する判断に当たって

○総括的意見

当美術館は、20年の歳月を掛けて築いてきた県内有数の文化・観光施設である。一度閉館してしまうと、その価値を取り戻すことはできない。よって、当検討会としては、ここに指摘する課題を解決すること、または解決に向けた調整を継続することを前提に、当美術館の譲渡を受け入れる価値があると判断する。

1 施設の重要性

- ・当美術館は、クレマチスの丘の中核をなす施設であり、当施設の閉館はクレマチスの丘のみならず県東部地域にも影響を及ぼす。
- ・当美術館が美術分野に限らず文化・観光面での活用が考えられること、東部地域に公的な文化・観光施設が乏しいことを踏まえ、県としては、当施設を閉館させることなく、活用する方向で検討すべきである。

2 課題

(1) 活用コンセプトの明確化

- ・現在の個人（ヴァンジ彫刻）コレクション中心の運営を継続するのではなく、県として新たな活用コンセプトを明確化する必要がある。
- ・方向性としては、庭園や建物を活用したアートセンター的な施設が想定され、演劇や音楽等のパフォーマンスの会場、障害者芸術やアートと医療・ケアの実践の場などの可能性が考えられる。

(2) 地域との連携の必要性

- ・これまで地域との連携、情報発信が不十分であったことから、クレマチスの丘各施設の連携、地元市町との連携、周辺との観光面での連携など、地域活性化の視点に立って、地域と十分に連携した運営を目指すべきである。
- ・その際には、長泉町をはじめ地元自治体から存続の要望もあることから、地元自治体等の負担も想定すべきである。

(3) 県への譲渡に当たっての課題

- ・展示しているヴァンジ彫刻作品が他美術館からの賃借品であるなど、資産の整理が不十分であり、将来的な財政負担とならないよう、賃借関係の解消を譲渡の前提とすべきである。

3 申し出に対する判断に当たって

- ・当美術館の2021年9月期の決算は、コロナ禍の影響を受けたとはいえ、1億3千万円余りもの赤字である。
- ・県は、活用コンセプト、それに基づく活用方法、中期的な収支計画等を明らかにし、十分検討した上で、申し出への対応を最終的に判断されることを提案する。

1 施設の評価

(1) 全体評価

- ・クレマチスの丘は大変ポテンシャルが高く、首都圏から見ても非常に評価が高い施設である。東部地域、特に伊豆半島は高齢化の問題を抱えているが、その中で、この周辺地域は裾野のトヨタのウーブンシティや御殿場のアウトレットなど、若者呼び込める魅力があるエリアである。
- ・その中核に位置するヴァンジ彫刻庭園美術館は、20年間の歳月をかけて築いてきた設立者の思いをひしひしと感じる貴重な財産であり、新たにこれを作ろうとしても時間と財源、大変な手間を必要とする。閉館するのは簡単だが、一度失ってしまえば、復活させることは困難である。
- ・解決すべき問題はあるが、存続させていくことが望ましい。

(2) ヴァンジ彫刻作品の評価

- ・美術館の展示物は全てヴァンジ作品であり、美術館の根幹となるコレクションが弱い。個人が趣味で集めたものを自治体が引き受けるには理由が必要で、説明責任が問われる。そのため、コレクション（ヴァンジ作品）の評価が重要となる。
- ・美術品の評価方法としては、美術史上の作品評価、現代の市場実績（マーケットプライス）を見ることになる。調査によれば、必ずしも世界的な評価を得てはいないと思われる。国内では他に4美術館が所有しているに過ぎない。（岐阜県立美術館、神奈川県立近代美術館、箱根彫刻の森美術館、宮崎県立美術館）
- ・したがって、活用の方向性として、ヴァンジ・コレクションを前提にすると限定されてしまう。「ヴァンジ彫刻庭園美術館」ではなく「彫刻庭園美術館」であれば、活用の可能性は広がる。

(3) 建物・庭園などの施設の評価

- ・美術館を評価するには、立地、施設、展示物、運営の4点によって検討する必要がある。交通の便は悪い、庭園や建物は素晴らしい、展示物は弱い、運営は今後の検討次第となる。
- ・来館者から見ると、彫刻の美術館というよりクレマチスの丘全体の魅力に対する期待が大きいと思われる。素敵な庭があり、そこに面白い彫刻があるというイメージで、くつろぎに行くという人が多い。日常と離れて読書をしたり、Wi-Fi環境を整えてワーケーション施設にするなどの可能性もある。活用の方向としては、彫刻にこだわらず、最大の魅力である庭園を強力で打ち出すべきである。
- ・がんセンターの関係者も来館しているが、ヴァンジ作品が目的ではなく、庭園でゆっくりすることを目的にしており、ガーデンホスピタルとして活用されている。

- 一方、庭園そのものに全国の有名な庭園と比較して突出した魅力やストーリーがある訳ではないので、庭園で打ち出すならば、徹底した取組も必要ではないか。
- クレマチスの盛りである5月、6月は素晴らしいが、その維持管理には多くの経費も必要となる。
- 建物は素晴らしいが、彫刻の恒常的な展示を常態としてきたため、バックヤードや管理スペースが不備である。リノベーションには相応の経費を要する。
- レストランの評価は高いが、富裕層がターゲットで、収益面では赤字である。

2 活用の方向性

<全体>

- ・ 県が引き受ける場合には、施設のコンセプト、理念、方針を明確化し、どのような役割を期待するかを明らかにすることが必要である。
- ・ 現状の運営・ビジネスモデルの継続では、持続可能な施設にならない。公益性と収益性をより発揮できる活用方法を検討する必要がある。
- ・ 運営に関しては様々な案があると思う。若い人を含め様々な世代からアイデアをいただきながら、地域に密着した使い方ができれば県が活用する意義が出てくる。

(1) 県立美術館の分館としての活用可能性

【県の提案】

- ◆ 県立美術館が所蔵する現代アート（立体）作品やロダン館収蔵の彫刻作品を展示し、県立美術館の移動美術展の東部拠点として活用

- ・ 従来型の美術館の分館という発想は避け、新しい性格の文化施設をつくるべき。
- ・ 県立美術館のコレクションを加える場合は、ヴァンジの名を外し、「彫刻庭園美術館」の性格を強化すべき。
- ・ 屋外展示は最小限にとどめるべき。
- ・ 有名な美術品は、中部地域や西部地域に行かないと見られない現状があるので、東部地域に質の高い社会教育施設が誕生する可能性は意味がある。
- ・ 教育施設としてポテンシャルが高いので、子どもだけでなく生涯学習施設として活用するなど、「社会教育施設」として、クレマチスの丘全体の活用を考えることができるのではないか。
- ・ 企画展によっては様々な年齢層に興味を持ってもらえるし、高い入場料でも入館してもらえる。現在、全国的にマイクロツーリズムが盛んとなっており、教育旅行に力を入れて活用すれば、県内からの集客も期待できるのではないか。

(2) 住民主体の創造活動推進の場（アートセンター）の可能性

【県の提案】

- ◆ アーツカウンシルしずおかと連携し、地域の協力を得ながら、県内に在住するアーティストによるアートプロジェクトの拠点として活用
- ◆ 館内や庭園において、美術作品に囲まれた環境の中で、演劇等のパフォーマンスや室内楽のコンサート会場として活用

- ・ 単なる美術館ではなく、次項目の視覚障害者向けの美術教育やガーデンホスピタルも含め、地域のアートセンターという位置付けでの活用が考えられる。
- ・ 美術館に劇場やコンサート会場、市民ギャラリーを併設した文化事業を行う複合施設として、地域で運営される特色あるアートセンターにできるのではないか。

(3) 障害者芸術の拠点、ガーデンホスピタル実践の場としての活用可能性

【県の提案】

- ◆特別支援学校や障害児者関係団体と連携し、障害児者の鑑賞機会の拡大に向けた展示活動や創造機会の拡大に向けた教育普及活動の研究の場として活用、さらには、その創造作品の発表の場として活用
- ◆がん患者とその家族の苦痛を最小限に抑えるため、当美術館の庭園を憩いの場、癒やしの場として活用

- ・今後、障害者文化芸術への支援は大きな課題になるので、その先進的な拠点とする可能性はある。最近注目されている「ソーシャルインクルージョン（社会的包摂）」の考えに合致する。アーツカウンシルとも連携して、教育、医療等幅広い人に文化芸術活動に参加してもらうなど、文化芸術による公益性が期待できる分野であり、公的活用の意味がある。
- ・県立がんセンターが近くにあることは強みであり、ガーデンホスピタルにとどまらず、アートと医療、アートとケア、アートセラピーなどに取り組む施設とすることも可能性としてある。アートと身体という観点から、SPACとの近縁性は高く、県の「演劇の都」構想にも組み込んでいけるのではないかな。
- ・障害者向けだけでなく、健常者が障害のある方がどのように感じているかを体験することはとても意味がある。最近では、「ダイアログ・イン・ザ・ダーク」という視覚障害者のアテンドで暗闇の中を歩いたりカフェでお茶をしたりする取組もあり、発展が期待される分野である。
- ・他県にない全く新しい施設が静岡県に、しかも県東部にできるというインパクトは大きい。
- ・ユニバーサルデザインの実践の土壌があるので、ユニバーサルデザインの聖地というイメージを出していくこともできる。

(4) 文化イベント、迎賓機能、文化・観光施設のネットワークの核の可能性

【県の提案】

- ◆地元マルシェと連携するなど、食・観光と連携した文化イベント開催会場として活用
- ◆地域外交施策の推進等において、賓客を迎えもてなす場合、地場の農産品を活用し、ホテル会場とはひと味違ったレセプション会場として活用
- ◆東部地域には、公的文化・観光施設が乏しいことから、当美術館を地域のネットワークの拠点とし、地域連携協議会（仮称）を設置するなど、地域の美術館、博物館その他の文化・観光施設と広域的に連携し、県内外からの集客及び地域の活性化を図る

- ・文化・観光施設としての活用については、沼津市に既存のプラサヴェルデがあり、他の市町にも様々な施設があるので、それらとの関係を考える必要がある。
- ・イベントや迎賓的な使用は恒常的なものではないので、主要な活用目的には位置付けは難しい。関連市町の連携も必要である。
- ・近年、アニメーションとのコラボが観光で人を集めるきっかけになっている。ワーケーションなど、新たな形態の観光や交流も進んでいるので、若い人のアイデアも活かして様々な取組ができるのではないかな。

3 地域との連携の必要性

- ・これまで地域との連携が不足していたのは事実である。情報発信も不足しており、観光業界、例えば観光協会や旅行会社との接点もあまりなかった。集客の取組強化の余地はある。
- ・長泉町は子育て世代を中心に転入人口が多く、がんセンターもあり、発展が期待される地域である。その魅力の一角を担う施設がこのような状況になったのは地元の責任でもあり、市町等の負担も考えるべきである。県だけでなく、長泉町やがんセンター、地域の住民を巻き込んで一緒に活用していくのが良い。
- ・活用に当たっては、関係市町の合意形成が重要であり、広域行政の観点から調整・整理が必要である。



4 県への譲渡に当たっての課題

(1) 賃借関係の解消など資産の整理

- ・美術品（ヴァンジ彫刻作品）のほとんどが美術館の所有となっておらず、ベルナール・ビュフェ美術館からの賃借となっている。また、駐車場の賃借関係もあり、毎年度、賃借経費が発生している。
- ・譲渡の前提として、契約関係や賃借関係のないよう、権利関係をきれいにするとともに、収益的にも賃借関係は解消すべきである。
- ・解消に当たっては、無償貸与、寄贈、返却などの様々な方法を検討するべきである。
- ・駐車場についても、敷地内に作ればよく、借りる必要はない。

(2) その他

- ・学芸員やガーデナーなどの職員の雇用に関しては、活用の方向に基づく必要性に従って判断すべきである。

5 申し出に対する判断に当たって

- ・県の財政が厳しい中、行政経営の視点では、「民間でできるものは民間で」が基本姿勢である。今回はその逆で、民間事業の県事業化となる。そのためには、公益性が高いこと、地域経済の発展に寄与すること、県民生活の向上など、理由の説明が必要であり、意志決定プロセスにおいても、情報公開などの透明性が求められる。
- ・県が引き継ぐ場合には、美術館の存在意義・使命・役割を明確化するとともに、中期的な収支試算、修繕計画、ファシリティマネジメント、経営計画が必要である。
- ・将来的には修繕も必要となり、新しい使い方をするなら改修コストが必要となる。長期的に安定した経営をするためには公益性と収益性の両方のバランスが必要であり、現状のままではなく、相当の経営改善が求められるものとする。
- ・こうしたことを踏まえ、活用計画を十分検討した上で、申し出への対応を最終的に判断するよう提案する。